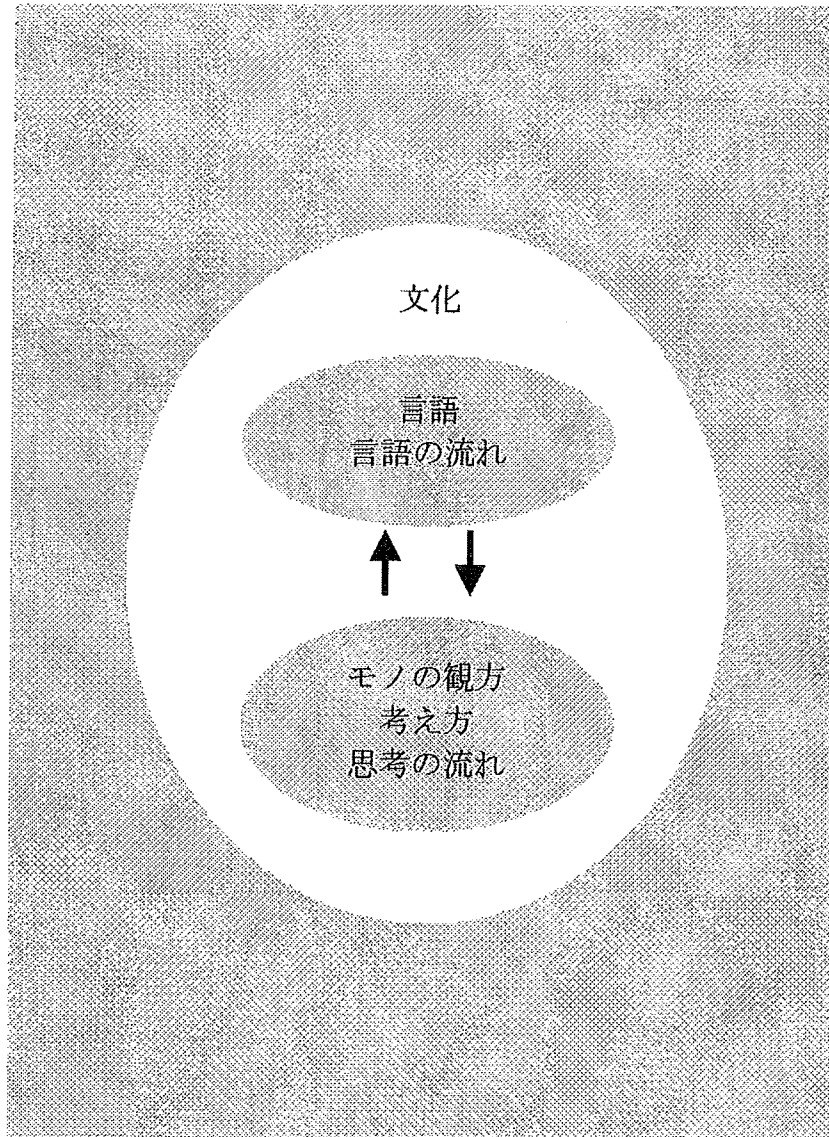


# はじめに

## 状況 (1) 文化と言語



### 文化と言語

ある程度まで同一的なモノの観方や考え方を共有している集団は、同じ文化を持っていると見なすことが可能でしょう。その、モノの観方や考え方は、言語で表現されます。同時に、人は言語でもって「考える」ことをします。従って、文化と言語は極めて密接な関係があり、一つの文化を共有している集団は、母国語もほぼ共有しているから見なすことができるでしょう。文化が言語を生み、言語が文化を育てると言われるゆえんがここにあります。

### 母国語

その人の母国語とは、その言語でものを考えているのがそれで、例えば、厳密な意味で、「バイリンガル」と呼ばれる人は、二つの言語で、どちらでも考えることができる人を指します。筆者である私自身の思考は日本語で行っているので、母国語は言うまでもなく日本語ということになります。その他の言語は意識して学習した外国語、どこまで行っても外国語に過ぎません。

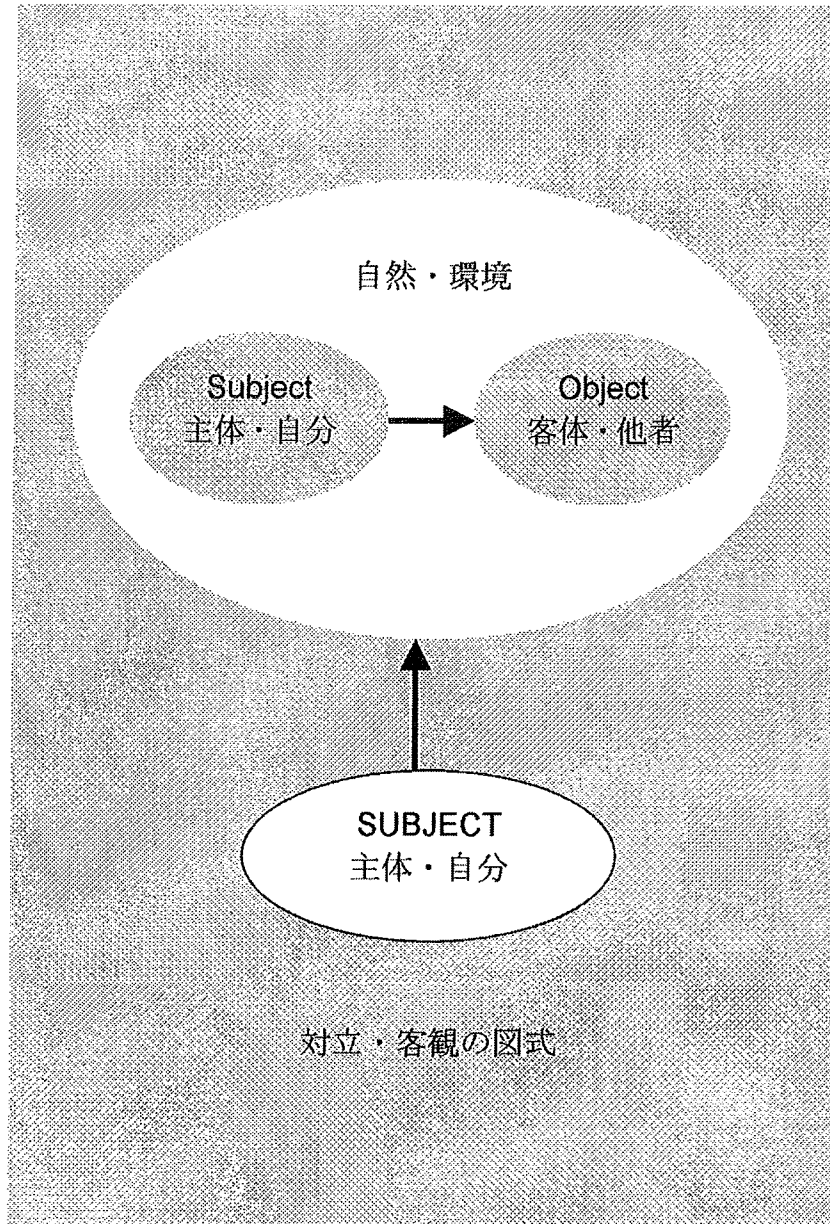
### モノの観方

モノを観る方式は、言語の構造に反映されます。

### モノを考える順序

モノを考える順序は、そのまま言語の順序に反映されます。これによって、人は快適に観察し、考え、それらを話し、書いているわけです。快適に、というのは、頭の中で衝突を起こしたり混乱したりせずに、意識せずに行えるという意味で使っています。

## 状況 (2) 西ヨーロッパ文化、あるいは西欧人のモノの観方、考え方と言語



単純化を恐れずに、西ヨーロッパの人々の、モノの観方、考え方を一まとめにすると、以下のようになります。西ヨーロッパからアメリカ大陸に移住した人々も当然この中に含まれます。

### 自分の確認

自分は何者であるかの確認を、他者との比較において、絶えることなく続ける、それを機会あるごとに表明（宣言）する。

### 環境の中の自分

自分が、ある環境の中で、何を、何のためにしているのかを、絶えず確認し続け、機会あるごとにそれを表明する。

### 客観

自然および他者を、自分と対立する客体（Object）として、客観的に（objectively）観察し、分析し、評価し、報告する。ここから、自然科学が生まれ、発展する。また、人間が構築した社会も同じように眺め、分析し、評価しようとする。ここから、科学かどうかに疑問は残るが、社会科学という分野が生まれる。

### 客体（Object）への働きかけ

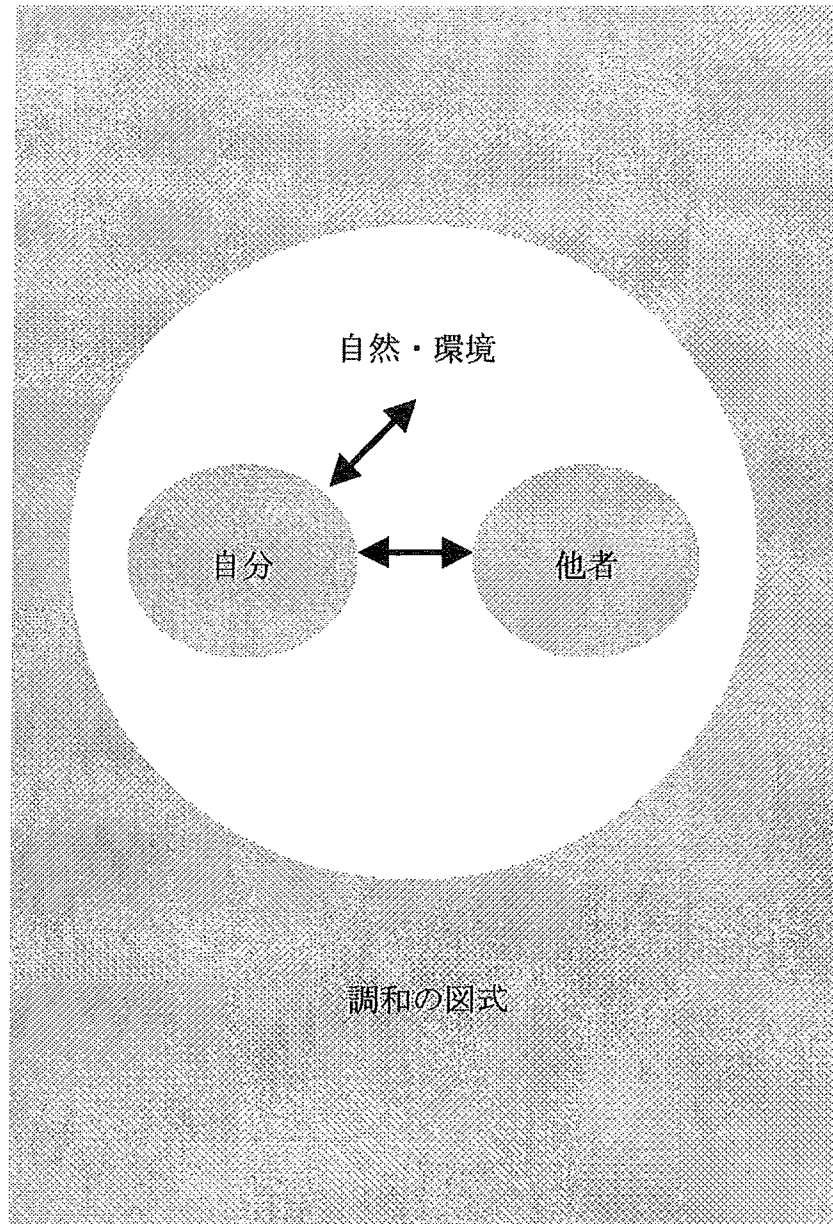
自分が、自然や他者に対して、何を、何のために働きかけているのかを絶えず確認し、それを機会あるごとに表明する。

### 情報重視

これらの基本姿勢から、自然や他者に関する報告を重視し、その情報収集に勤め、それを分析評価する作業（インテリジェンス）を重視し、そこへの働きかけを、戦略的計画の下に、行うという形が出てくる。

\*すべて自己から発しているために、しばしば自己に都合のいい色眼鏡つき分析をして失敗するという副産物もあります。

### 状況 (3) 日本文化、あるいは日本人のモノの観方と考え方と言語



私自身を含めて、日本人のモノの観方や考え方を、単純化をおそれずに図式化すると、以下のようになります。

#### 溶け込む

自然・環境の中に溶け込んで存在している自己を確認し、その自然・環境の説明をつけて、自己の存在を「控え目」に表明する。つまり、自然を客観的に眺めることはせず、その中に溶け込み、自然と一体化する。当然、ここからは、自然科学は生まれない。\*進んで表明を行うものは「厚顔」とか、あまり良い評価を得られない。

#### 同列・対等

人間以外の生物を含めて、自己と同列の、つまり対等の存在と認め、その相手との関係の中で自己の存在を確認する。自己表明は、従って、相手の存在を意識し、調和を最優先してなされる。つまり、常に全体の中の自己という図式での確認であり、全体を語らずして自己を語ることは難しい。

\*西欧の人には、どうしても理解できない考え方として、例えば、戦争という人為的厄災（空襲とか）さえも、地震とか台風のような自然がもたらす災害と同列に受け止めてしまうという、日本人に基本的な対応の仕方がある。

\*また、古い話で恐縮だが、第1次の南極観測隊がやむを得ず犬を置いて帰国した時の、日本人と西欧人の反応の違いにもこのことは見られる。われわれは、犬達を仲間として（自己と同列の存在）、せめて鎖を外してやっておけば、と痛恨の思いがした。西欧人は、何たる動物虐待と強い非難を投げてきた。連れて帰れないのなら、どうして殺さなかったのか、というわけだ。彼らにとっては、自己から見て犬は客体としての家畜であり、その生殺与奪は飼い主の責任ということになる。責任を果たさぬ残酷な動物虐待の日本人になってしまうわけだ。

## 状況 (4) 日本語と英語の違い

英語	$S \rightarrow V \rightarrow O$ 固定
日本語	$(S) \rightarrow O \rightarrow V$ または $O \rightarrow (S) \rightarrow V$
英語	主張 結論 重要 $\rightarrow$ 説明 理由 瑣末
日本語	状況説明 理由説明 全体 $\rightarrow$ 主張 結論 要点

英語OSを搭載する

以上のように、文化の違い、つまり、モノの観方や考え方の違いは、当然言語の違いに反映されています。それは、言語の構造の違いと、表現の順序の違いとなって現れています。

### 英語の特徴

英語の特徴は、日本語と比較した場合、以下の二点に現れています。

(1) 主体 (Subject) 抜きでは事が始まらない。Sが何であり、それが何をしているのか (V)、客体 (Object) に何を働きかけている (V) のかをはっきりさせる。流れも、このSVOに固定される。モノの観方の基本形であるから、この順序は変えられない。

(2) 自分が何者であるか、先ず主張し、その後で解説を加える。つまり重要なことを先に述べ、次第に瑣末の事項へと続く

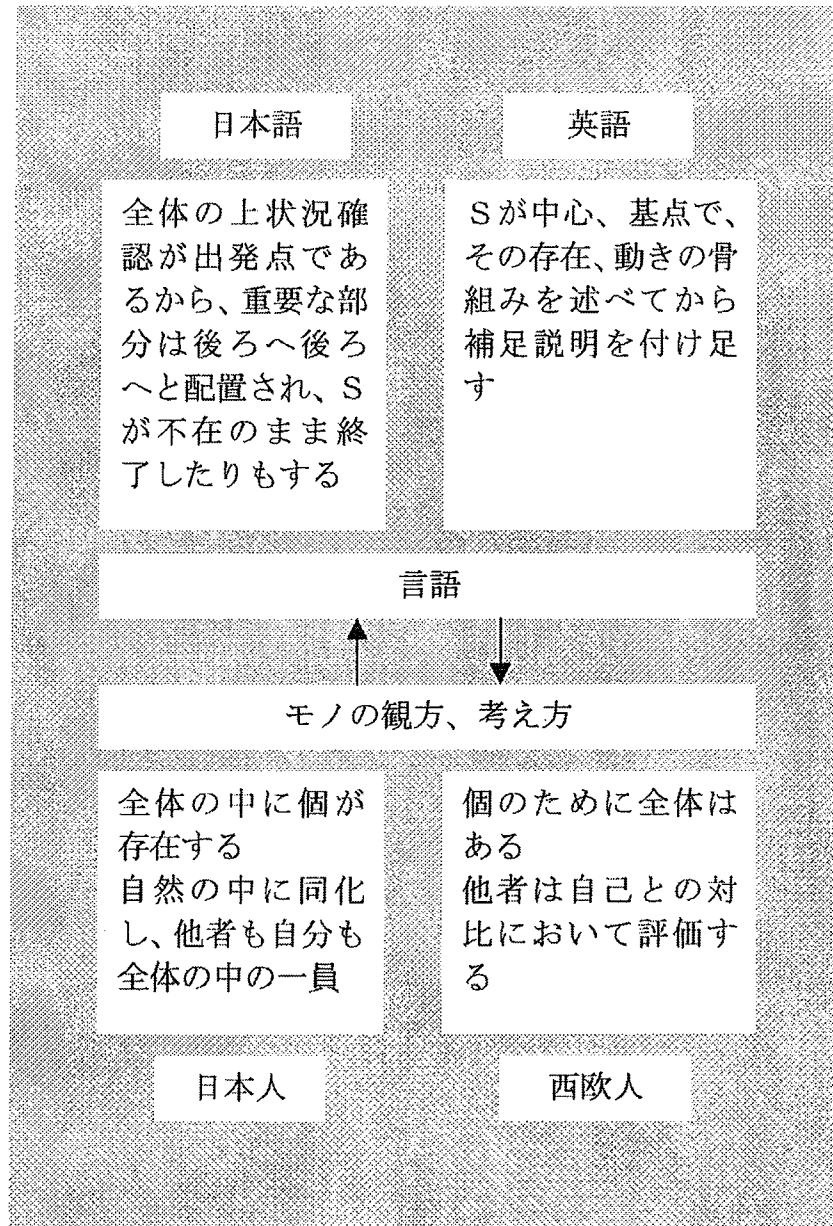
### 日本語の特徴

(1) 主体が全体の中に溶け込んでいるので、Sを表面に出さなくとも、言語として成り立つ。しかも、全体の説明から入るので、Oを先頭にでも、途中にでも配置でき、何をどうしているのか、Vを一番最後に置きさえすれば、その途中は自由に並び替えできる。

(2) 同じく、全体の中の自分ということから、全体を説明してから主張なり結論を述べる。これは、存在の基本形であるから、言語においてもこの順序は変えられない。

\*日本語には主語 (subject) が無いと、極端な意見を吐く人もいますが、主語が無いのではなく、表に出さなくとも言語としての形を取れるということです。つまり、主語は存在するのだが、あからさまに表に出すことを控える、出さなくとも理解してもらえる文化の下の言語。

## 状況 (5) 日本人は英語が苦手



日本人が英語が苦手であることは、自他共に認めるところです。その優秀な頭脳との対比において、“日本の七不思議の一つ”などと西欧人にかからかわれたりします。頭が良いのに、たかが英語ぐらいできないのはおかしいじゃないか、というわけです。しかし、苦手なのは、当然なのです。以下に、その要点を記します。

### 処理の順序

ここまでみてきて分かるように、人は言語（母国語）で考えるので、観方や考え方の違いは、処理する順序に現れる。英語と日本語の順序が違うことは、日本語処理手順にはそのままでは乗らないことになる。コンピュータ風に言えば、日本語オペレーティングシステム（OS）では、手順が違うので、処理でないことになる。処理不能の情報が入ってきたときの反応として、最も自然なのは、拒絶反応である。つまり、英語を言語として受け入れ処理することを、玄関口で締め出すという対応になる。

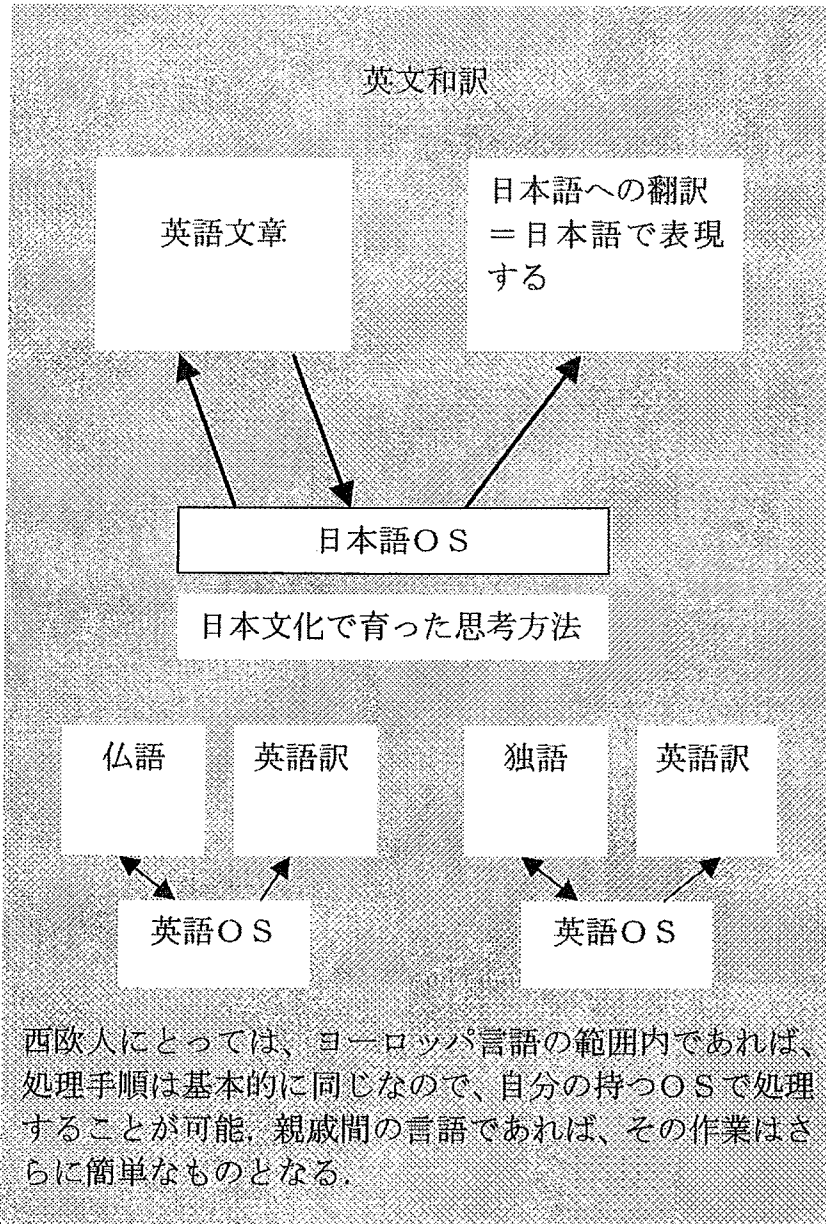
### 苦痛

異なる処理手順でモノを考えようとすることは、至難の業であり、頭脳に多大の負荷を掛けることになる、その作業は明らかに苦痛であり、とりわけ、なぜ異なるのかという理解無しに、ただ闇雲に外国語を覚えることを強制されれば、その苦痛はさらに増えるだけとなる。

### 取り組みの第一歩

英語と取り組む第一歩は、何よりも、日本語と英語では処理の手順が異なることへの認識におかなければならないといえるだろう。この認識は、果たして行われているのだろうか。

状況 (6) 従来の英語教育の誤り ; (1) 英文和訳



日本人はなぜ英語が苦手なのか、長年勉強をしてきているのになぜ身に付かないのか。その基本的な原因は、もともと、言語の処理手順があまりにも違いすぎるところにあることを見てきました。さらに、英語の教育方法に大きな誤りがあり、ただでさえ困難な英語修得という課題に大きな混乱をもたらしてきており、いまだに改善されていないようです。以下にその要点を示したいと思います。

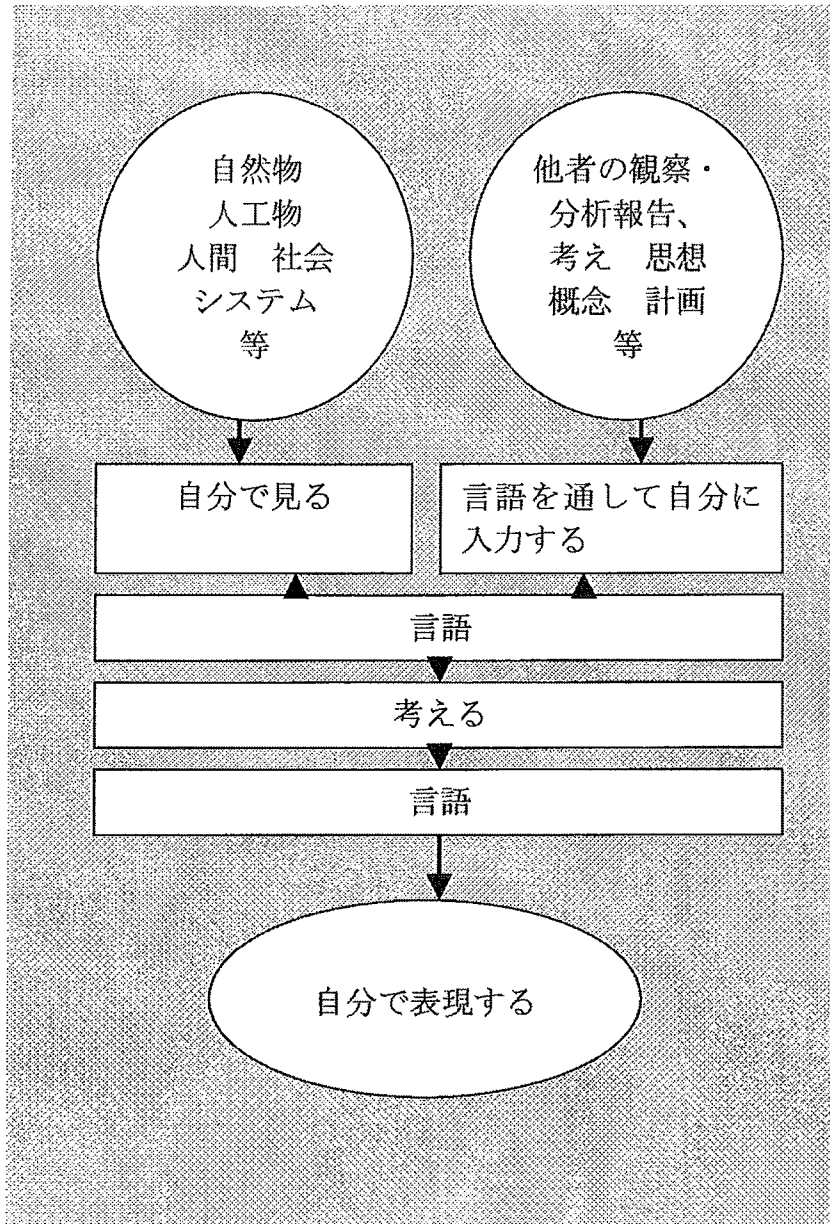
**英文和訳**

日本での英語教育の最大のガンは、英文和訳という「学習」を強いているところにある。この作業は、英語文章を、日本語処理装置（日本語オペレーティングシステム）にかけ、日本語処理手順で英語文章を「解体」し、日本語順序に並べ直して、日本語文章として表現することにある。日本語処理の頭で英語を眺めたときに、既にそれは言語としての英語ではなくなり、解剖対象の物体のようなものとなる。英文和訳の勉強は、英語の教科というより、むしろ国語の教科とすべきであろう。

**なぜこのような学習方法が**

日本人は、歴史以来、外国から事物、概念、システム等を輸入して利用するとき、すべて「日本風」味付けをするという文化的習慣があり今も続いている。この習慣は、もちろん多くの面で利点として作用し、その結果、日本という存在の確認証明は保持されてきた。一方、欠点も当然あり、その最たるものは、海外の思想、概念、制度、システムといったものを、「自己流に」理解し、それで理解したと思い込むところにある。生のまま、まな板にのせて、その本質を分析してやろうという対決の姿勢は持たない。

状況 (7) 従来の英語教育の誤り ; (2) 言語として扱わない



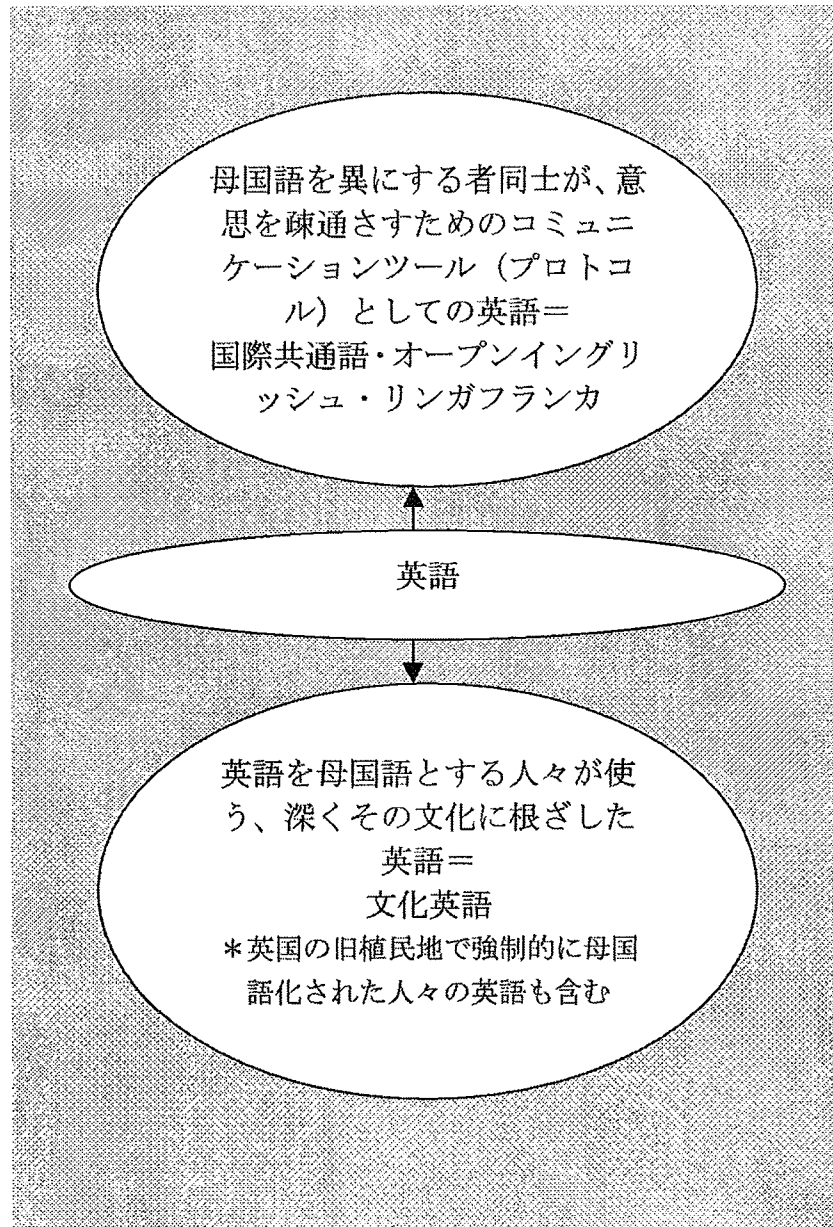
人間は言語を基盤にしてモノを考える、と述べてきました。そして、自分の考えを言語で表現します。従って、母国語以外の言語でモノを考え、その結果を表現するという事は、特に日本語のように、西欧言語とその処理手順が大きく異なる言語を母国語としている者には、大変な難事業となります。それでは、日本における英語教育は、どのような目的で、中学一年生から義務教育としているのでしょうか。以下に、若干の考察を記します。

言語として扱っていない？

一つの考えを表現するには、そこに、言語として必要なまとまり、つまりセンテンスを形成していなければならない。他とのつながりを持たない単語だけを並べても、そのレベルでは、何を言わんとしているのか相手に伝わらないので「言語」にはならない。\*脈絡のない単語でしか表現できない人は、言語能力以前に、思考能力に欠けると見なされます。

日本語処理手順の上でいくら英語を解剖しても、言語としての英語が身に付かないことは既に(6)で記した。同時に、英単語とそれに相応する日本語単語のデータベースを頭の中にいくら増やしても、つながりを表現できなければ、それはまだ言語にはならない。それでは、日本の学校での英語教育は、生徒・学生にいったい何を学ばせ、身につけさせようとしているのか。日本語は英語と比べると劣性なので国語を英語に変える？(まさか)。外国人と道で会ったら「ハロー」と言えるようにする？(まさか)。海外でハンドバックのお買い物ができるようにする？(まさか)。米国に移住できるようにする？(まさか)。教養を高めるため、少しは英語が分かるようにする？(まさか)。結論として教育意図は不明。

状況 (8) 従来の英語教育の誤り ; (3) 文化英語の押し付け



英語には二種あります。一つは、いうまでもなく、英語を母国語としている人々が使う英語（文化英語）です。もう一つは、母国語を異にする人々の間で、コミュニケーションを取るための手段として、唯一のものとして、（仕方なく）使う英語（国際共通語）です。日本の英語教育は、そのどちらを習得させようとしているのでしょうか。

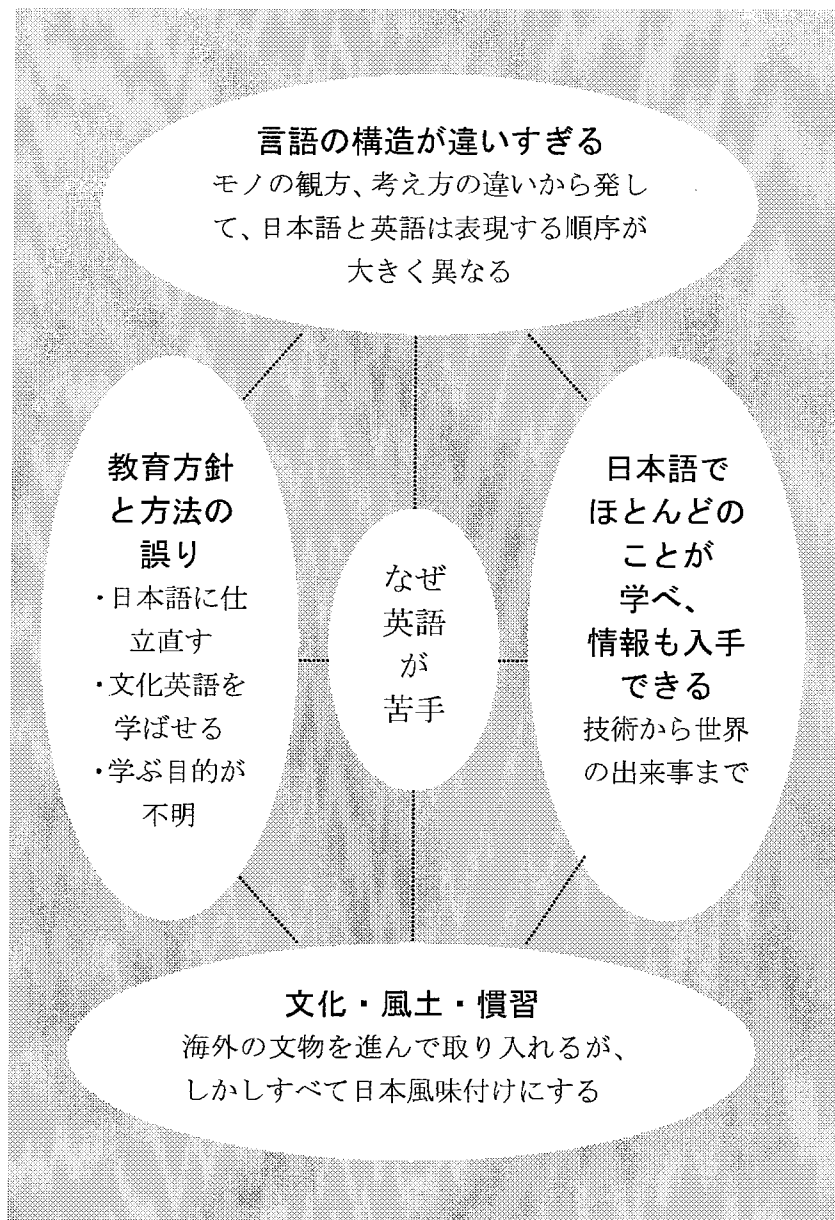
**アレルギーを起こさせる**

処理手順が大きく異なる言語を学ぶことは、大変なことを述べてきました。その上に、さらに、文化としての英語を押し付けられれば、先ず大半の人はアレルギーが生じるでしょう。イギリスや米国の文化が、外国人に分かるわけもなく、発音が同じようにできるわけもないのですから、生徒・学生全員が「英文学者」になることを目指しているのなら話は別でしょうが、何で、文化に深く根差した慣用的な言い回し（イディオム）などを教室で勉強しなければならないのでしょうか。英語を嫌いにさせるための嫌がらせが、45年の戦争終結以降60年にわたって、いまだに学校で続いているのではないのでしょうか。

学校で英語教育が必要というのなら、基本としては、英語というものを題材にして、言語というものに興味を持たせ、結果として日本語の能力を向上させることにあるのではないのでしょうか。国際化した社会の中で、その前線で仕事をしたい者には、コミュニケーションのツールとして国際共通語としての英語処理能力を身に付けさすことでしょう。英米の文化、社会、文学等に専門的興味がある者は、大学で専門的に学べば良いし、ルイビトンのお買い物ができるようになりたい人には、街の英会話教室に任せるべきでしょう。



## 状況のまとめ：日本人はなぜ英語ができないか



日本人はなぜ英語が苦手なのか、状況の考察をまとめると：

### 1. 言語として違いすぎる

モノの観方や考え方の違いから発して、日本語と英語（西欧語全般）の構造、つまり表現する順序が違いすぎるので、受信・発信の処理が極めて難しい。英語が苦手なのは当たり前と言えるでしょう。

### 2. 教育方針と方法の誤り

この違いに正面から取り組み、学習の解決策をはかるのではなく、また、なぜ英語を学ぶのかという目的を明らかにしないまま、無理やり英米の「文化英語」の学習を押し付けたり、英語を日本語で処理するやり方ばかりを教えているのが、学校での英語教育と言えるでしょう。これでは、大半の生徒、学生が英語が嫌いになるのは当然のことです。

### 3. 日本風味付け

日本人は、海外の文物の取り込みは大好きであるが、すべて日本風味付けをしないと受け取らないという文化風土の中で何千年生きてきています。これは大きな利点であると同時に、海外の文物を生のまま受け止め、対決する厳しい姿勢に欠ける結果となっています。

### 4. 何でも日本語で

日本語の構造上の柔軟性とカタカナという便利な道具のお蔭で、そして上で述べた文化風土と知識への強い需要のもとで、自然科学から哲学まで、世界の政治経済から芸能の出来事まで、何でも日本語で学び、情報を入手することができます。これが近代工業化成功の原動力となり、同時に、自分の都合のよいようにしか世界の物事を受け止められない「田舎人」を作りだしています。